

なんじゃもんじゃ・宮の渡しコース 見どころ

④なんじゃもんじゃについて

正式名「ヒトツバタゴ（一葉たご）」、日本では本州中部の木曾川流域と長崎県の対馬に自生する、モクセイ科の雌雄異株の落葉高木。その由来には諸説あるが、「なんという名前の木かわからなかった」ので通称「なんじゃもんじゃ」となったというのが一般的。毎年4月末から5月初旬の7日から10日前後の短い間に白い花が咲き、その姿はまるで雪がかぶっているよう。

⑤「熱田空襲」の被爆記念碑（あつたくうしゅうのひばくきねんひ）

太平洋戦争末期の昭和20年6月9日の熱田空襲の痕跡が残る堀川堤防の一部を永久保存する記念碑。空襲は当時軍需品を製造していた愛知時計電機などが標的とされ、43機のB29が飛来し、2,068人もの多くの命が失われ、付近住民や工場に動員されていた若い勤労学徒も多数犠牲となった。碑はその際、爆弾片で傷ついた工場すぐわきの堤防の一部を切り取って作られた。

⑥熱田荘（あつたそう）

木造・2階建・切妻造・^{きんがわらぶきひらい}棧瓦葺平入り・^{ひさしつき}正面庇付で、この建物は明治29年（1896年）武藤兼次郎が建てた「魚半」という料亭であった。太平洋戦争中は三菱重工業の社員寮として、現在は高齢者福祉施設として利用されている。

⑦宮の渡し公園・七里の渡し（みやのわたしこうえん・しちりのわたし）

東海道のうち宮・桑名間は唯一の海上路で、七里の渡しの名称は移動距離が7里（27.5キロ）であったことに由来する。宮の渡し付近には当時、旅籠が約240軒あり、交通の一大拠点として、また尾張藩の海の玄関として栄えた。現在では「宮の渡し公園」として整備され、船の出入りの目印として寛永2年（1625年）に建てられた「常夜燈」も「時の鐘楼」とともに復元されている。桑名側にも七里の渡しがある。また公園内には、伊勢湾台風について書かれた表示板と、被災当時の付近一帯の最高浸水位を示す標識が設置されている。

⑧熱田魚問屋モニュメント（あつたうおどんやもにゅめんと）

大瀬子公園辺り一帯は、「熱田魚市場」として栄えた場所である。市場の創設時期ははっきりしないが、名古屋開府以前から魚座（魚市場）があったといわれている。寛永年間（1624年～1644年）に、尾張藩は大瀬子と木之免に市場を設けさせ、各4軒ずつ問屋が設置された。近海はもちろん遠国からも魚介類が運びこまれ、大正・昭和時代には我が国有数の魚市場として繁栄した。往時の賑わいを現在に伝えるシンボルとして、平成31年3月に完成した。

⑨断夫山古墳（だんぷさんこふん）

全長151mで、東海地方最大の前方後円墳である。6世紀初頭に築造され、古来、「日本武尊」の妃「宮簀媛（ミヤヅヒメ）」の墓と伝えられていたが、現在では天孫を祖とするといわれている豪族「尾張氏」の墓と考えられている。永らく熱田神宮の所属地として管理されていたが、戦後、名古屋市市の戦災復興事業として仮換地され、昭和55年に愛知県の所有となった。昭和62年7月9日、国の史跡に指定された。

上記で紹介したウォーキングコースの見どころの他にも、周辺には「名古屋国際会議場」、「白鳥庭園」、「熱田神宮」といった名所も多く存在します。お時間がありましたら、ぜひ訪れていただき熱田区の魅力にふれていただければと思います。

また、なんじゃもんじゃ並木道を抜けた先にある「熱田白鳥の歴史館」は、本日特別開館を行っております。「木材産業発祥の地」とされる熱田白鳥の歴史や、これからの木材利用などを、写真・絵巻（複製）や映像等でご覧いただけます。（入館は無料 開館時間9:00～11:00）